

英国のシティズンシップ教育：導入の目的と今日の実践・課題

—— 英国のシティズンシップ・人権・ジェノサイド教育のより幅広い活用の事例 ——

ケヴィン・I・マシューズ（トマス・ハーディ校）

青木敬子 = 訳（要旨）

（明治大学）

Introduction —— 講演者のこれまでの経歴及び思想

来日講演へお招きいただき、御礼を申し上げます。これからどのような経緯によって、この場で講演しているかをお話しします。皆さまは私の簡単な経歴について、レジュメをご覧になっていると思います。私自身は何かの専門家というわけではありません。私の経歴は、「多芸は無芸」というように、様々なことを32年間経験してきています。そして現在は英国の上位公立学校と評される学校に勤務しています。この学校は人権とジェノサイドについての教育科があり、私はこの科の責任者をしています。私は自分が生徒だった頃、『シンドラーのリスト』を観て、ホロコーストのことを理解したいという気持ちに突き動かされました。しかしこの分野を教えることになったのは、偶然の出会いによるものでした。ホロコーストに興味を持っていた私にシティズンシップの先生が、UCL（ロンドングローバル大学）で上演される、ヤヌシュ・コルチャックの演劇を観てみないかと話を持ち掛けたのです。この出会いはまさに聖パウロがダマスカスへ向かう道での出会いのようで、大変感銘を受け、またこのコルチャックの成し遂げたことを自分も目指したいと思いました。

コルチャックを皆さまもご存知とは思いますが、具体的に彼がどのようなことを書き残したかを、ここで少し紹介します。

ヤヌシュ・コルチャック（1878-1942）：ポーランド、ワルシャワ出身。小児科医、児童文学作家。孤児院を設立し、そこで子どもの理想的共同体を目指した。子どもたちの生まれによってではなく、ポーランド国民であるなら、ユダヤ教でなくとも子どもを受け入れた。

私にとって印象に残る彼の言葉は、「子どもたちは未来を生きる人々ではない、今を生きる人々である。そして我々すべての敬意を受けるべき存在である」。このように彼が残した子どもの人権についての考えは、国連の子どもの権利条約でも活かされています。ユダヤ人であるコルチャックの運命を大きく変えたのが、20世紀初頭のナチスドイツです。孤児院は閉鎖させられ、ゲットーへ移動。その後亡命の機会もありましたが、子どもたちとともにウムシュラクプラッツ（集荷場）からトレブリンカキャンプへ移動したのです。3年前、私はこのキャンプを訪ねました。もし次の機会があれば、ガス室の中で歴史の遺物の掘り起こしをし、ホロコースト否認論

へ挑みたいと考えています。というのもトレ布林カキャンプを、ただの移送キャンプだという多くの政治家や歴史家がいるからです。

私にとってコルチャックは、国民、地球市民として最良のお手本です。彼の改革的な考えは、ポーランドのみならず、子どもたちの生活を世界規模で変えたのです。世界が多様化する中、私自身が世界的な見解や政治、またある人の生き方と相容れないこともあります。自分が共感できない相手であっても人として尊敬に値しないとは思いません。向き合わないのではなく、会話を開くのです。もし真の意味で世界が進化するなら、子どもたちは自由に考え、そして国民、地球市民への道を開くにちがいない、というのが持論です。

昨年、幸いにも福島、京都、東京を訪れる機会がありました。そこでは小さなセミナーで、様々な領域について、英国、日本の教員たちが意見を交換しました。例えば女子の科学教育について、多様な伝達能力の重要性、ICT技術の授業への活用です。私はそこで自分の領域として、自分がこれまで経験したことから学校教育における人権教育について話しました。そこから見えたシティズンシップ教育というのは学問領域を超えて、統合的なシステムを用いて教育全体で行われるべきだということです。この点における事例はのちほどお話しします。

市民か臣民か？

シティズンシップ教育について最初にお話しすべきことは、我々が公民 (citizens) でなく臣民 (subjects) であるということです。我々はまだしばらくはEUの公民ですが、現在も変わらないのは、エリザベス2世である女王の臣民なのです。EUの公民ではありますが、EUが定める単位ではないものを日常の中で使用しています。身近な例ですと、メートル (metre) 法を使用しないし、ビールは英パイント (pint) の単位を使います。しかし「壊れていないものは、修繕しない」という英国のことわざが、現代は時として、壊れないかもしれないけど、時代遅れになるから新しくしよう、という考えになります。技術革新に追いつくため、近代化するものがあるのです。

英国におけるシティズンシップ教育も少々このような状況で、ひとつの全体的な目的もなく、やり方も同じにはなりません。それでも教育は、若者たちへ議会がどのようなことを進めようとしているかを教えていますし、議会の考えをどのようにして若者へ伝え広げるかという共通のテーマはあるのです。興味深いことに、高い年齢層の人々がEU離脱へ投票し、若者はEUに留まることを選択しました。しかしシティズンシップ教育を受けていた世代 (18~24歳) は、投票数が最も少なく、国の未来がかかるこの政治行動に参加しませんでした。

また行動を起こした若者の中には、他者を思いやる、コミュニティの団結などのプロジェクトをボランティアで行うこともあります。しかしながらその一方でイスラム系の移民に対しての、ヘイトスピーチや犯罪も増えています。「国に帰れ」という声を、英国移民3世や4世にまであびせています。では彼らは、本格的な英国国民、臣民の定義を言えるのでしょうか。私にはわかりません。我々のアングロサクソンというアイデンティティは英国人 (British) ではないのです。ドイツ人やオランダ人です。典型的な例は聖ゲオルギウスで、ドラゴンを退治し、プリンセスを救う騎士道の話が英国人は大好きなのです。サッカーでもゲオルギウスはモチーフになりますが、

彼はアルバニア人です。シティズンシップのテストにはこの聖ゲオルギウスの日を問題に出しています。なぜこのような問題を出すのでしょうか。みなさんも不思議に思うでしょう。他にも食生活における例や、マグナカルタ大憲章、イングランド銀行（Bank of England）などにおいて、英国民とは何かと考えさせられる例がいろいろとあります。

私は授業の時に、生徒に向かって「英国人（British）であるとはどういう意味ですか？」と尋ねても誰も答えません。このことは自分たちでもわからないことです。単一のアイデンティティではないのです。私はこの点が気に入っています。しかし英国人（British）がどういう意味か、シティズンシップ教育がどのように定義されるかについて、誰もが意見を言えるような討論をするべきだと考えます。前政権で掲げた概念「英国の価値」は、寛容、敬意、自由、民主です。これらは、常に英国が体现し、支持してきました。しかし大英帝国時代は寛容でもなく、民主的でもなかった時代がありました。現在の「英国の価値」は、先進国としての我々が推進してきたと、みなしています。しかし一つの国が、他の国を先導し自分たちを先進と呼んでいたとしても、過ちを犯したならば、その過去の間違いに向き合うべきだと考えます。この点について、過去の過ちに向かい合い、成功した国の事例があります。それは中央アフリカにある、ルワンダです。国民は自分たちが何者で、ルワンダの国民が何を意味するかという、明確な考えを持っています。民族問題で1994年、100日で9千万人が大量虐殺されましたが、歴史的経緯を基本とした民族の概念を廃止し、伝統に従い、アフリカの概念を持つことで、驚くべき成功をもたらしたのです。英国においても、この「英国の価値」という考えから階級や宗教、文化、性に頼ることのない社会、すべての人に共通するような概念を持つことで良い方向へ向かうでしょう。

英国は宗教国とは断言できません。無神論者と思っている人は増加しています。多くの人は自分たちが、何らかの宗派に属しているという認識もあるのに、宗教へ参加していないのです。このことが英国をいくつかに分裂させ、信心深い共同体の代わりに、緊張状態の共同体になったのでしょう。

私見ではありますが、1997年の最初のブレア内閣から現在のシティズンシップ基金までの努力が実らず、学校におけるシティズンシップ教育は真の価値を見出せていません。またシティズンシップ教育を教えたくない人がそれを担当することもあります。これは我々の学校も例外ではないのです。さらにシティズンシップ教育は主要教科を教える時間をとるために、カットされることもあります。これもまた私の考えですが、なぜ我々の学校のシティズンシップ教育が前回の教育視察において、優秀と判定されたのかというと、シティズンシップ教育をたった週に1時間のような限定した教科にしていないからです。統合的なシティズンシップ教育は、カリキュラムの枠を超えて、生徒がただの勉強でなく、コルチャックが言うような、人としての成長を促すような考えの基にあるのです。それには後でお話する、キャラクター教育への取り組みも関わっています。ここではまずナショナルカリキュラムからの資料を提示します（資料内容省略）。

シティズンシップは、英国の生徒たち、彼らの両親、社会からあまり重要と考えられてはいないでしょう。若者の成長にとって重要な役割というより、ソフトスキルを成長させるための、追加的教科とみなされています。彼らにとって大切なのは、核となる主要教科です。我々教員が懸念しているのは、その結果、彼らの創造性が狭くなり、経済的にも国が発展できない結果を導い

てしまうことです。もし国の経済を成功させたいならば、子どもたちを創造性のある、技術革新できる人々にしなければならないのです。

公民、臣民であるということより、我々が学校教育において「シティズンシップ」ということを教えようとするのは、若者が過去を理解した上で成長し、不確かな未来に備えるという考えです。さらにすべての人が生き残るということだけでなく、すくすくと育つために、いざとなったら互いに助け合うという考えでもあります。ただし、とてもカリキュラムの中だけでは、大きすぎる話となるでしょう。必要なことは、学校全体、社会全体が支援するということです。ここでルワンダの事例を紹介します。

ルワンダ、再生のための4つの概念

ルワンダ紛争

牧畜民のツチとその王が農耕民のフツを支配する国であった。1889年ドイツ領となり、1918年以降はベルギーの統治下であった。ツチは中間支配層であった。ベルギーへのクーデター以降はフツが、大統領に就任したが、ツチを排除する政策がとられていた。その後1962年に共和国として独立。しかし独立後、少数派のツチが実権をとり、フツが大量虐殺を行う。1987年ウガンダに逃れていたツチが、再び内戦を起し、ルワンダでは反ツチのイデオロギーが掲げられた。フツの力は拡大し、ルワンダ虐殺へと至る（『日本大百科全書』小学館、1994年）。

ジェノサイドの後、フツとツチは言語をフランス語とルワンダ語から、ルワンダ語と英語へ変えました。政府もフランス語の使用を禁止し、英語を共通言語として選択しています。国内は混乱し、政府は沈静と和解をはじめたとき、掲げた概念は19世紀の植民地時代のものでしたが、次の概念になります。共同体への奉仕、市民教育、尊厳、記憶。これらの概念を目標に人々が行動をはじめ、国を再生しました。治安が回復し、経済も世界が驚くほど発展したのです。ルワンダの人々は、過去の過ちを打ち消すように、人々を尊敬し、コミュニティの活動に参加し、道路の清掃から、高齢者へのサービスなど活動をしています。また市民教育の中では様々な人々が、政治について学ぶため、会議に出席し、政府はまた彼らに対し民主的透明性の姿勢をみせ、説明責任を遵守しています。ルワンダ人はすべての国民が国の成功に必要と考えています。

キャラクター (character) 教育

私の考える教育制度で、本質的にあるべき側面としてあげたいのが、キャラクター教育です。バーミンガム大学のジュビリーセンターがその先駆けであり、人間のキャラクター、徳目と価値について、研究領域を超えてリサーチをしています。このセンターはこの教育分野へ先進の資料提供をしています。

キャラクターとは人の特性で、動機や指針に影響する道徳的感情をつくる気質です。キャラクター教育というのは、若者が個人の長所を発達させるための明示、暗示の教育活動を表す包括的

用語です。生徒は、なりたいたいと思う自分になるために、必要な選択を賢明に為さなければなりません。この選択をしていく過程で、良識や実践的な知識が発達するのです。その知識や能力は困難な状況で、いかに正しいことを選択するかを意味しています。このような能力は、選択をする経験や倫理的知見の成果を通して徐々に育つのです。この教育の最終的な目標は、民主的社会の枠内で、何かの選択を迫られたとき、自分自身による判断で、賢明な選択をするための知のツールを備えることです。

私自身はこのキャラクター教育を大変支持しています。キャラクターを徳の実践にて発達させることで、自分を調和のとれた人として創造し、自分の考えを広げることになります。またそういった力があれば世界で起こる悪い行いにも挑むことができるでしょう。

R.E.I

友人であるカール・ウィルケンス博士の考えで、この概念は、たとえある人がどんな間違いをしても、すべての人間は、Rを表す尊敬 (respect) に値するという視点から生まれた考えです。私は個人的に人間尊重主義であることからR.E.Iの概念を持ちますが、カールはキリスト教再降臨派の牧師として神の教示からこの考えを正しいと理解しています。Eを表す共感 (empathy) は互いを理解する能力です。無条件に尊重する姿勢を人に表すことが、鍵となります。Iを表す包含 (inclusion) は社会の向上において基盤となる概念で、他者と協力するには、前向きな印象を他者に対して与えることが大切です。自分の慣れた世界から出て、良く知らない相手との共同作業をするなら、相手を理解し、相手の価値観を理解することになります。そのようなことを生徒たちに教えています。長期間の仕事であっても、この概念によって携わる人々の伝達能力や技術がよりよく高められ、創造性も発展させることができるのです。

結論

私的見解ではありますが、シティズンシップ教育は、一国内だけでなく、グローバルな教育として存続すべきと考えます。単なる成績をつけるだけの一教科としてではなく、カリキュラムの枠を超えた、不可欠な社会教科として価値があるのです。我々教員は、生徒たちが社会の不確実な状況、障害に対して、新しい、独自性のある考えによって自分自身で対処する強いキャラクターを持てるように、教育するべきだと思います。政治によるサポートも不可欠ではありますが、ルワンダの例にもあるように自分自身の力が大切です。他の人を待つのではなく、今日、自分で為すことが大切なのです。